

MY LIBRARY 0102

(注)本稿は「中東協力センターニュース」2008年10/11月号に掲載されたものです。

GCC 諸国の王家・首長家 (第2回)

アブダビ・ナヒヤーン家

1. ナヒヤーン家の歴史

アラブ首長国連邦(UAE)最大の首長国であるアブダビはナヒヤーン家によって代々統治されてきた。初代は18世紀のイーサ・アル・ナヒヤーンに遡る。当時のペルシャ(アラビア)湾は交易船に対する海賊行為や近隣首長国間の抗争が絶えなかったが、第4代ムハンマド首長時代の1820年にオマーンを含む周辺国と大英帝国との間で海賊行為と奴隷貿易を禁止する条約が締結され、地域一帯は「休戦土候国」と呼ばれるようになった。

その後アブダビは沿岸交易あるいは砂漠のオアシス農業の拠点として比較的平穏な時代を過ごし、第8代ザード首長(在位1855 - 1909年)の時代に国勢は大いにあがった。彼は今日のナヒヤーン家の基礎を築き「ザード大首長」の尊称が与えられている。

しかし1909年にザード大首長が亡くなると、首長の座をめぐる息子達の間血で血を洗う抗争が発生した。病弱の長男ハリーファは首長に就かず、代わって次男のタフヌーンが第9代首長に即位した。しかしタフヌーンは即位3年後の1912年に弟のハムダーンに暗殺された。そのハムダーンも即位10年後にやはり弟のスルターンに暗殺された。ところが第11代首長となったスルターン(在位1922 - 27年)は7番目の弟サクルに暗殺され、さらにサクル第12代首長も在位わずか1年で暗殺の憂き目に遭っている。わずか20年足らずの間に4人の首長(しかも兄弟)が暗殺によって交代するという異常事態であった。

1928年にスルターン第11代首長の長男シャクブートが第13代首長に即位してナヒヤーン家の血の抗争は漸く終結した。その後1962年にアブダビで石油の商業生産が始まり同国に発展のチャンスが訪れた。しかしシャクブートは石油による収入を浪費したため1966年に退位させられ、弟のザードが第14代首長となった。ザード首長時代の1971年12月、アブダビ、ドバイ、シャルジャ、ウンム・アル・カイワイン、アジュマン、ラス・アル・ハイマ及びフジャイラの7つの首長国はアラブ首長国連邦(UAE)を結成し、ザードは初代大統領に選ばれた。

ザードはアブダビの豊富なオイル・マネーをUAE連邦全体の発展に注ぎ込んだ。現在もUAEの歳入の殆どはアブダビ首長国の石油によるものであるが、彼はその石油の分け前を他の首長国にも気前良く分け与えたのである。UAE発足当時は小さな港町に過ぎなかったドバイが今や地域随一の交易地に発展したのは、ドバイを支配したマクツーム家の先見の明もさ

ることながら、ザーイドがドバイのインフラ整備を財政面でサポートしたからに他ならない。



UAE を構成する各首長はかつて互いに覇を競った間柄であり、また遊牧民ベドウィンとして高い矜持を持っていたため、連邦国家としての統一を保つのは必ずしも容易ではなかったが、ザーイドは卓抜な行政能力に加え、豊かなアブダビの富を分配することで各首長から全幅の信頼を得るようになり、またその飾り気の無い人柄により一般国民からも敬愛され慕われるカリスマ的な指導者となった。ザーイドは2004年11月に86歳の高齢で亡くなったが、彼が在位した1966年から2004年までの38年間に UAE は飛躍的な発展を遂げた。国民の生活レベルを一流水準に引き上げ、また外交面では穏健な政策と安定した石油の供給国として世界的な評価を定着させた彼の功績は大きく、彼が UAE の歴史に残る名君であったことを疑う者はいない。

ザーイドが亡くなった後は長男のハリーフアが第15代アブダビ首長となった。なお皇太子はザーイド首長の三男ムハンマド(ハリーフアの異母弟)が指名された。このように現在はスルターン第11代首長の系統がナヒヤーン家の後継者として定着している。ハリーフア首長は UAE 大統領も兼務している。

なおザーイド大首長の長男ハリーフアの系統はナヒヤーン家の有力な家系として現在まで続いている。彼の息子ムハンマドは従兄弟のザーイド前首長を助け、ナヒヤーン家の長老として一族の重鎮の役割を果たし、ムハンマドの息子ムバーラクは UAE 発足当時の副首相を務めた。また後述するようにムバーラクの息子二人は現在 UAE 連邦政府の閣僚である。

2. ザーイド前首長の息子達

前アブダビ首長(第14代)のザーイドは6人の王妃と結婚、19人の王子がいる(家系図参照)。19人のうち10男のナーセル王子は今年6月にヘリコプター事故で亡くなったが、その他18人の王子は健在である。

ザーイドとハッサ王妃の間の一人息子が長男のハリーフア(1948年生)であり、2004年にザーイドが亡くなった後、第15代アブダビ首長兼アラブ首長国連邦(UAE)大統領となっている。ザーイドの二番目の息子スルターン(1953年生)は UAE の副首相である。

三番目の妻ファティマ王妃はムハンマド(3男、1960年生)を筆頭にハムダーン(4男、1963年生)、ハッザ(5男、1965年生)、タフヌーン(12男、1969年生)

マンスール(13男、1970年生)及びアブドラー(18男、1973年生)の6人の息子を生んでおり同一王妃の王子の人数としては最も多い。そしてムハンマドが皇太子であるほか、その他5人の弟達も連邦政府の要職を占め、現在のナヒヤーン家の中では最大の勢力を誇っている。

4番目のアイシャ王妃との間にはサイド(6男、1965年生) ナヒヤーン(8男、1967年生) ファラハ(14男、1970年生) ディヤープ(16男、1971年生)の4人の王子がおり、アブダビ首長府の要職に就いている。また5番目のアミナ王妃はイーサー(7男、1966年生)及びナーセル(10男、1968年生)の二人の王子がいたが、既に触れたとおりナーセルは今年6月に死亡した。

最も若い6番目のモーザ王妃には5人の息子がおり、王子の数はファティマ王妃に次いで多い。年齢順でいえばサーイフ(9男、1968年生) アハマド(11男、1969年生) ハマド(15男、1971年生) オマル(17男、1972年生) ハーリド(19男、1978年生)となる。このうちサーイフ、アハマドの長兄二人はUAE連邦政府の要職にあり、モーザ王妃の5人兄弟は、ファティマ王妃の6人兄弟の対抗勢力と考えられる。

3. ザーイド一族とムハンマド一族の姻戚関係

冒頭に述べたごとくザーイド前首長は彼の従兄弟で1970年代にナヒヤーン家の長老であったムハンマドの子供や孫達と強い姻戚関係を結んでいる。ザーイド自身がムハンマドの娘ハッサを妻とし、二人の間に生まれたのがハリーフア現首長である。

ザーイドの息子や孫達も以下のようにムハンマドの娘や孫娘を娶っている。

<u>氏名(ザーイドとの関係)</u>	<u>妻(ムハンマドとの関係)</u>
ハリーフア首長(長男)	氏名不詳(ムハンマド3男タフヌーン東部州知事の娘)
スルターン(2男)	シャムサ(ムハンマドの娘)
ムハンマド皇太子(3男)	サラーマ(ムハンマド長男ハムダーン元副首相の娘)
ハムダーン(4男)	シャムサ(同上)
サイド(6男)	シェイカ(同上)
イーサー(7男)(最初の妻)	マリアム(同上)
(二番目の妻)	氏名不詳(ハムダーン元副首相長男カリーファの娘)
アブダッラー(18男)	氏名不詳(ムハンマド4男サーイフ元保健相の娘)

ハムダーン元副首相の娘4人がザーイドの息子達に嫁いているが、特に母親(ファティマ)を同じくするムハンマド皇太子とハムダーン外相の妻が姉妹であることは注目に値する。一方、これとは逆にザーイド前首長は22人の娘のうち5人をムハンマドの息子3人(タフヌーン東部州知事、サーイフ元保健相他1)及びハムダーン元副首相の息子2人に嫁がせて

いる。またハリーフア現首長もその娘2人をハムダーン元副首相およびタハヌーン東部州知事の息子に嫁がせている。このようにザード及びその子供達とムハンマドの子孫は複雑な血縁関係を結んでいるのである。

4．政府組織におけるナヒヤーン一族の地位

(1) 連邦政府閣僚

アブダビ首長国は7つの首長国からなるアラブ首長国連邦(UAE)の一つであるが、面積はUAE全体の80%を占め、またGDPの60%を稼ぎ出しているため連邦財政の大半はアブダビが負担している。このようなことから既に説明したとおりアブダビ首長でありナヒヤーン家の第15代当主であるハリーフア首長が連邦大統領を兼務している。

また連邦政府(首相:ムハンマド・ドバイ首長)の閣僚にもナヒヤーン家の王族が重用されている。ムハンマド首相が今年2月に行った改造内閣の閣僚ポストは24あるが、そのうち副首相、内相、外相など7つの重要ポストをナヒヤーン家の王族が占めている。ドバイのマクトゥーム家の閣僚がムハンマド首相(兼国防相)及びハムダーン財政相の2名にとどまっております、またアブダビ、ドバイ以外の首長国の王族閣僚はシャルジャのルブナ海外通商相1名だけであることからアブダビのナヒヤーン家が連邦政府内でいかに大きな勢力を保持しているかがわかる。

副首相： スルターン・ビン・ザード (前首長二男)
副首相： ハムダーン・ビン・ザード (前首長四男、ムハンマド皇太子実弟)
内相： サーフ・ビン・ザード (前首長九男)
大統領相： マンスール・ビン・ザード (前首長13男、ムハンマド皇太子実弟)
外相： アブドラ・ビン・ザード (前首長18男、ムハンマド皇太子実弟)
高等教育・科学相： ナヒヤーン・ビン・ムバーラク (カーリーファ系)
公共事業相： ハムダーン (同上、高等教育・科学相実弟)

上記のとおりナヒヤーン家王族の中でもムハンマド皇太子の実弟3人が副首相、大統領相及び外相の地位にあることが目を引く。ファティマ王妃を母親とする6人兄弟の残る二人も以下に述べるようにUAEまたはアブダビの政府機構の要職を占めている。さらに政府系ファンド(後述)も兄弟たちが実権を握っており、現在のナヒヤーン家ではこの6人兄弟の傑出ぶりが際立っている。

(2) その他の息子達の官職

ザード前首長のその他の息子達も以下の通り連邦政府あるいはアブダビ首長府の要職を占めている。

(ファティマ王妃の息子達) ハッザ (前首長5男): 公安庁長官

タフヌーン (前首長 1 2 男): 大統領私設事務所長
(アイシャ王妃の息子達) サイド (前首長 6 男): アブダビ港湾庁長官
ナヒヤーン (前首長 8 男): 首長家警備隊副司令官
ディヤープ (前首長 1 6 男): アブダビ水電力庁長官
(アミナ王妃の息子) イーサー (前首長 7 男): アブダビ公共事業庁次官
(モーザ王妃の息子達) アハマド (前首長 1 1 男): 財政工業省次官
ハマド (前首長 1 5 男): アブダビ経済庁長官
オマル (前首長 1 7 男): 大統領侍従武官

5. アブダビ政府系ファンドとその支配者

アブダビは人口比率では UAE 全人口の 34%であり、ドバイの 32%とさほど大きな差はないが、GDP の比率では UAE 全体の 60%を占めており、第 2 位ドバイの 29%、第 3 位シャルジャの 7.4%をはるかに凌駕している。UAE は 1970 年代の二度にわたる石油ショック以来恒常的な経常黒字の様相を示している。例えばオイルショック直後の 1980 年に UAE はすでに 100 億ドル強の経常黒字を計上していたが、その傾向は近年特に顕著であり今年の黒字幅は 659 億ドルと見込まれている。

この経常黒字がまさにオイル・マネー(ペトロ・ダラー)であり、アブダビ首長国はこのオイル・マネーを運用する機関として 1977 年に同国初の政府系ファンド (SWF) アブダビ投資庁 (ADIA) を設立した。現在 ADIA の資産総額は 9 千億ドル前後と推定されており、株式、債券を中心に運用されている。ADIA の会長はハリーファ首長、副会長はムハンマド皇太子、専務理事はアハマド財政省次官であり、いずれもザイド前首長の息子達である。

アブダビはその後 1984 年に石油部門への投資を目的とした第 2 の政府系ファンド「国際石油投資 (IPIC)」を設立した。IPIC の運用資産は 100 億ドル程度とみられ、日本のコスモ石油の株式 20%を取得するなど国際石油業界で一定の存在感を示している。現在の会長はムハンマド皇太子の実弟マンスール連邦大統領相である。

そして 2002 年には余剰オイル・マネーの受け皿として運用資産 100 億ドル(推定)のムバダラが設立された。ムバダラは株式投資及び先端技術案件に対する投資をターゲットとして見られ、米国の投資グループ、カーライル(7.5%出資)のほかフェラーリ、AMD などに投資、最近では米国の GE と 80 億ドルの投資会社を設立するなど活発な動きを示している。ムバダラの会長はムハンマド皇太子である。

また 2007 年にはハリーファ首長を議長、ムハンマド皇太子を副議長とするアブダビ投資評議会 (ADIC) が設立された。ADIC はそれまで ADIA が所有していたアブダビ投資会社を移管する形で新たに設立されたものであり運用資産は 2~3 千億ドルと言われる。ADIC は最近ニューヨークのクライスラー・ビルを購入したと報じられている。

さらに同じ 2007 年に UAE 連邦政府直轄の首長国投資庁 (Emirates Investment Authority, EIA) が設立された。EIA の役割は明確ではないがアブダビとドバイそれぞれが有する政府系

ファンドを総合的に管轄し投資の重複を避けるための調整機関ではないかと推測される。EIAの会長はムハンマド皇太子の実弟マンスール連邦相である。アブダビの政府系ファンドは以上のようにムハンマド皇太子と彼の实弟たちが実権を握りつつあると考えられる。

なおドバイのムハンマド首長とアブダビのムハンマド皇太子の二人のムハンマドは非常に親しい関係にあるとされており興味深い事実である。これまでアブダビとドバイは同じUAE連邦の中にならぬ相互にライバル意識、対抗意識が強く必ずしも緊密な関係ではなかった。ところが最近ドバイ首長 アブダビ皇太子の両ムハンマド枢軸が浮き彫りになり、例えば昨年アブダビ投資庁がシティ・グループに75億ドルを出資した時もその背後にムハンマド・ドバイ首長の影があったと言われる。

6. 後継者問題



ハリーファ現首長はオマーン国境に接するオアシスの町アル・アインで生まれた。アル・アインはナヒヤーン家の町でもある。彼は1966年に東部州代表に任命され、1969年には22歳の若さで皇太子となった。その後、1971年7月に首相に任命され、同年12月のUAE連邦結成時に連邦副首相に指名された。1987年に脳梗塞の手術を受けている。

ハリーファ首長は今年60歳(1948年生、但し1949年生まれとの説もある)であるが、最も若い異母弟ハーリドは30歳であり、ハリーファとの差は30歳となる。1960年生まれで48歳のムハンマド皇太子とハーリドは18歳違いであるが、二人の間に16人の壮年期の同腹・異腹の兄弟がひしめいていることは、ナヒヤーン家の後継者問題を考える上で重要なポイントであろう。

兄弟の数が勢力の強弱を意味する訳ではないが、数の上だけで見るならば二つの有力な兄弟集団をあげることができる。一つはファティマ王妃を母親とするムハンマド皇太子ら6人兄弟のグループであり、他の一つはモーザ王妃を母親としサーイフ内相を長兄とする5人兄弟のグループである。但しモーザ妃の5人兄弟は長子サーイフですら未だ40歳の若さであるため、父ザーイド存命中ならともかく他の異母兄弟グループに比べ勢力的には劣勢と見られる。

このように見ればムハンマド皇太子を頂点とする6人兄弟がアブダビ首長国の実権を掌握していると見てほぼ間違いのないであろう。それはザーイド前首長が亡くなった直後、アブ

ダビ首長国の内閣に相当する執行評議会(Executive Council)の改造人事に伏線があったと考えられる。このときムハンマド新皇太子が評議会議長に就任、彼の直ぐ上の異母兄のスルターンが副議長を退き、また有力外戚であるムハンマド系統(上述)のタフヌーンも退任しているからである。

ハリーファ現首長の次はムハンマド皇太子が首長位を継承し今後もザイド前首長の系統に受け継がれていくことは間違いない。しかしながらザイドには19人の息子があり(ただし今年1名が死亡したため現在は18名)それぞれ異母兄弟の関係にある。このためザイドの晩年には既に兄弟間に不協和音が生じていたとも言われている。ザイドはそのカリスマ性でナヒヤーン家一族ににらみを利かせてきた。これに対しハリーファ現首長にはそのようなカリスマ性は乏しく、しかも彼自身か



つて脳梗塞の手術を受けており60歳とは言え健康に一抹の不安がある。彼はナヒヤーン家内部の権力闘争、連邦を構成するドバイ首長国の独自の動き、さらには隣接するサウジアラビアからの圧力等多くの難問を抱えており、今後の舵取りが注目される。

以上